

＜子育て＞過程における親の「学び」に向けた基礎的研究

—学会誌掲載論文の分析から—

永田 誠

A Basic Study of Parents Learning in the Child-rearing Process :
From analysis of articles published in academic journals

NAGATA, Makoto

大分大学教育学部研究紀要 第44巻第1号

2022年9月 別刷

Reprinted From

RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 44, No. 1, September 2022

OITA, JAPAN

＜子育て＞過程における親の「学び」に向けた基礎的研究

—学会誌掲載論文の分析から—

永 田 誠*

【要 旨】 本稿では、学会誌掲載論文から関連学問領域において＜子育て＞がどのように語られてきたかを整理することで、学際的視点から＜子育て＞研究の特色を検討した。

学会の掲載論文数ならびに年代の把握からは、＜子育て＞研究は、20年余りの蓄積はあるものの、比較的新しいテーマであり、親の「学び」と子どもの「育ち」を生み出す＜子育て＞という教育的営為の意義を捉えるには十分ではないことが確認できた。一方で、その論文数はいずれの学会においても増加傾向にあり、子育て支援や家庭教育支援の政策的な登場を契機として、＜子育て＞への研究関心は広がりつつもある。それは、関連学会において主たる課題となりえず、研究的な狭間に置かれてきた＜子育て＞研究に対する理論萌芽への期待として捉えられよう。

【キーワード】 子育て 親の「学び」 家庭教育 計量テキスト分析

I 本研究の目的と方法

1 問題と目的

本稿では、学会誌掲載論文から関連学問領域において＜子育て＞¹⁾がどのように語られてきたかを整理することで、学際的視点から＜子育て＞研究の特色を検討する。これを通して、現代の親の＜子育て＞経験を通じた「学び」が、いかに親自身の子育て観や子ども理解の変容を促すかを解明するための実証的調査研究に向けた視角を検討したい。

＜子育て＞に関する研究は、テーマとしての汎用性は有するものの、個々の学会・研究者の課題関心等に応じた捉え方がなされており、概念的な曖昧さを有する。実際に、子育て中の親の「学び」(家庭教育・家庭教育支援)は社会教育学・教育学・生活体験学習学などにおいて親(成人)を主体としながら議論されてきた。一方で、保育学・乳幼児教育学は、子どもの育ちを支える存在としての親の「育ち」(保育・子育て支援)が語られている。加えて、家庭・家族の機能と変容については、家族社会学、教育社会学、家族心理学などで、子育てにおける社会的支援は、地域生活支援学・社会福祉学の福祉領域や地域保健・公衆衛生学等の保健領域で、専門職のアプローチから議論が重ねられている。これらの学問領域・分野での方法論としても、

令和4年5月31日受理

*ながた・まこと 大分大学教育学部発達科学教育講座(幼児教育学)

制度研究から比較研究、歴史研究、実践研究と多様なアプローチがなされている。

また、<子育て>をめぐる研究では、親が変容するという事象についての学問的・研究的な関心はあるものの、社会教育学では子育てにおける「親の学び」という用語が用いられる一方で、保育学では「親育ち」が用いられるなど、研究的知見についての領域間の対話は乏しい。そのため、『教育学研究』（2014）において「保育学と教育学の間」の特集が組まれるなど<子育て>をめぐる対話が志向されつつあるものの、あくまでも限定的であり、<子育て>という多様性や多義性の把握が一面的なものに留まる。それにより<子育て>に関する様々な問題状況が指摘され、政策的に解決策が提案されても、それぞれの取り組みが散発的となり、実践的な混乱や迷走をもたらすことにつながり、問題状況を解決するには至っていない。

したがって、<子育て>研究における概念規定の第一歩として、学会ごとにどのような捉え方がなされ、どこに相違点が存在しているかを学問領域ごとに整理することが求められる。こうした<子育て>に関する多義性を学際的に把握することで、今後の<子育て>研究における対話を生み出す一助としたい。

2 先行研究レビューの方法

<子育て>に関する学会掲載論文の量的把握の方法としては、①当該学問領域において全国規模かつ学術団体に登録されている、②設立からおおむね20年以上活動を継続している、③毎年度、学会誌・紀要等を継続的に発刊している、④<子育て>に関する研究テーマ・研究が実施されていると推察される、⑤図1に示す4分野に該当する学問領域である、の5つの条件を設定した。この条件に照らし合わせ、本稿の分析の対象として、以下の学会誌等を選定した²⁾。

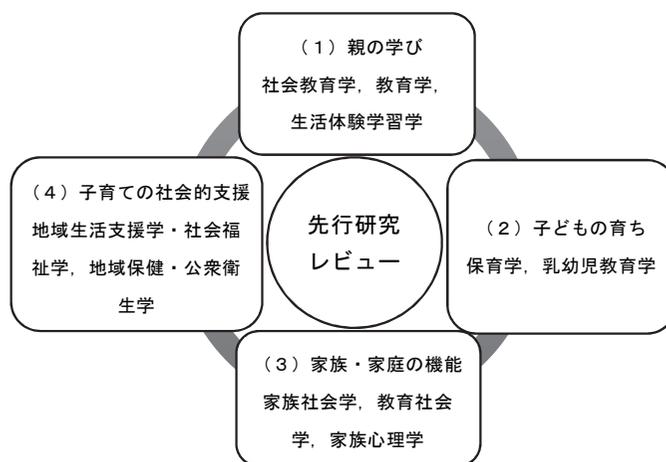


図1 <子育て>研究の学問領域ごとの概念図

- (1) 親の学び：日本社会教育学会『社会教育学研究（日本社会教育学会紀要）』、年報『日本の社会教育』
- (2) 子どもの育ち：日本保育学会『保育学研究』
- (3) 家族・家庭の機能：家族社会学『家族社会学研究』、日本社会学会『社会学評論』
- (4) 子育ての社会的支援：日本社会福祉学会『社会福祉学』

上記の学会誌に掲載された論文のうち、本研究のキーワードである「子育て」「家庭」「親」「保護者」をタイトルに含む論文の掲載数ならびに掲載年を把握した。論文検索には CiNii

Articles を用い、2021 年 4 月～11 月の期間で検索・閲覧した³⁾。作成した<子育て>に関する学会誌掲載論文一覧を用いて、各学会の研究の動向・視角を把握するため、論文名から計量テキスト分析を行った。分析には KH Coder (3.Beta.04a) を用いた (樋口 2020)。

本稿では、<子育て>に関する学会誌掲載論文の推移を把握するとともに、論文題目の共起ネットワークを描くことで、学会間での研究の特徴を明らかにする。また、<子育て>に関するキーワードを学会間で比較することで、<子育て>研究における視角の検討を試みた。

II 関連学問領域における<子育て>に関する先行研究の量的把握

1 日本社会教育学会における<子育て>研究の動向

日本社会教育学会は、1954 年に設立され、会員数は約 1,000 名を要する教育学系の学会である。日本社会教育学会において「子育て」「家庭」「親」「保護者」をタイトルに含む論文掲載数と年代は図 2 の通りである。なお、「保護者」をタイトルに含む掲載論文は確認されなかった。

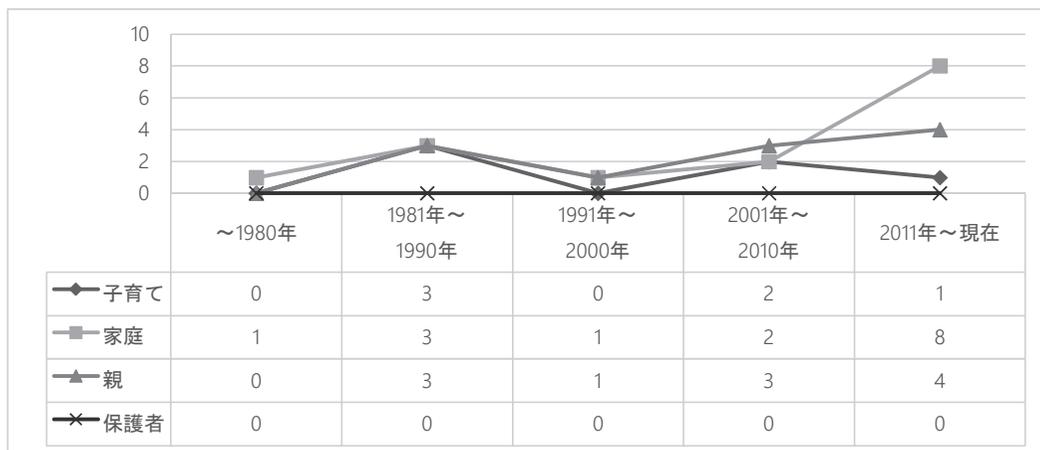


図 2 日本社会教育学会における<子育て>掲載論文数の推移

日本社会教育学会における<子育て>関連の掲載論文数を見ると、①学会誌への掲載論文数としては必ずしも多くない、②2000 年代以降の掲載論文が 20 本 (62.5%) を占めており、2000 年代以降に掲載論文数が集中している、③「子育て」「家庭」「親」のいずれも増加傾向にある、の 3 点が確認できた。また、1980 年代に論文数が増加した要因としては、年報『日本の社会教育』において第 26 集『婦人問題と社会教育』(1982 年) と第 32 集『現代家族と社会教育』(1988 年) の発刊があることも確認できた。

日本社会教育学会における<子育て>掲載論文題目の傾向としては、「家庭を学校や地域の連携として捉える」視点が明示されるとともに、「親による子育てをどのように地域で支援するか」や「家庭教育支援や子育て支援といった社会教育事業・実践をいかに展開・支援するか」という問題意識が看取される。(図 3)

これらの結果からは、日本社会教育学会では、2000 年代以前から家庭教育や親に対する研究関心が一程度存在していたものの、<子育て>は必ずしも学会の主要な研究関心とはなりえず、

家庭教育における理論蓄積は限定的であった。ただ、1990年からの子育て支援や家庭教育支援の政策的な登場を契機として、2000年代から家庭教育の捉え直しや研究対象・フィールドとなりえてこなかった実践への関心が集まりつつあることが理解できる。特に、学習主体として親を捉える研究の視点に、その特徴を見ることができよう。

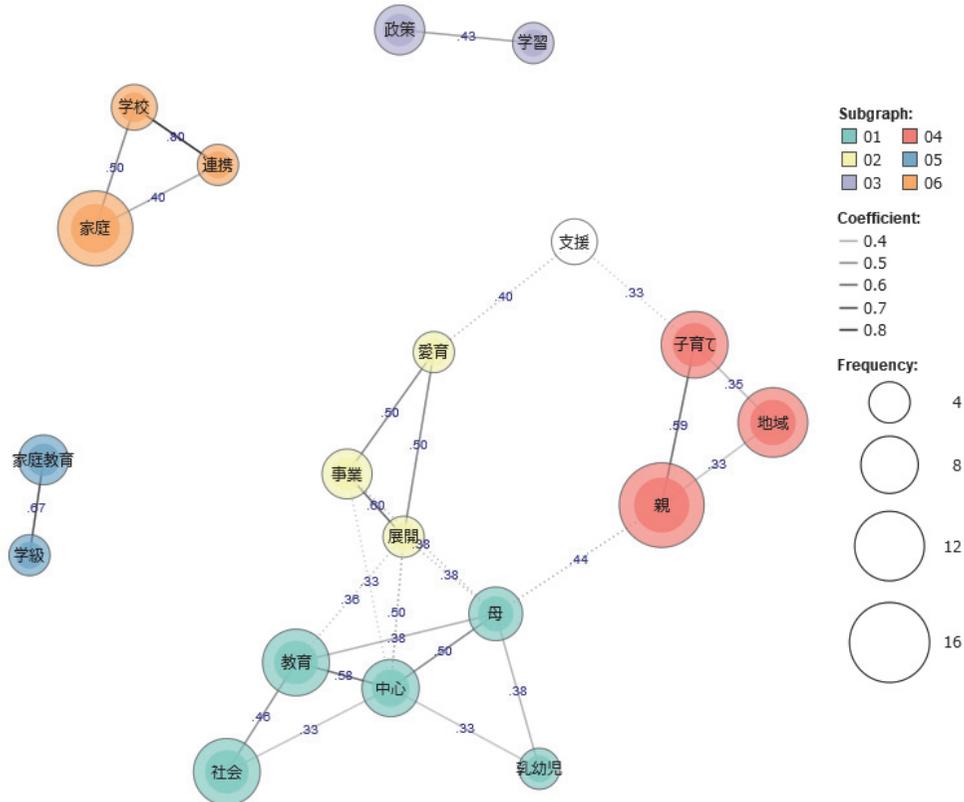


図3 日本社会教育学会における<子育て>掲載論文題目の共起ネットワーク

2 日本保育学会における<子育て>研究の動向

日本保育学会は、1948年に設立され、幼児教育・保育学の研究者に加え、幼稚園教諭・保育士等の実践者も参加する、会員数6,000名を超える学会である。日本保育学会における「子育て」「家庭」「親」「保護者」を題目に含む掲載論文数と年代は図4の通りである。

日本保育学会における<子育て>関連の掲載論文数を見ると、①「親」と「保護者」をあわせた論文数が61本と最も多く、施設保育・保育者だけでなく、親にも研究的関心が一定程度存在する、②2000年代以降の掲載論文数が占める割合が91.5%と急増する、③他のキーワードに比べ「家庭」をタイトルに含む論文数は少なく、子育ての場としての家庭の位置づけは低い、という3点が確認できた。

また、日本保育学会における<子育て>掲載論文題目の傾向としては、①障害児を含む乳幼児の発達と保育相談支援活動の検討、②幼児教育における家庭との連携と保育者との関係構築、

③子育て支援活動における親・保護者支援, ④地域子育て支援センター等の施設・事業の意義, といったテーマが読み取れる。(図5)

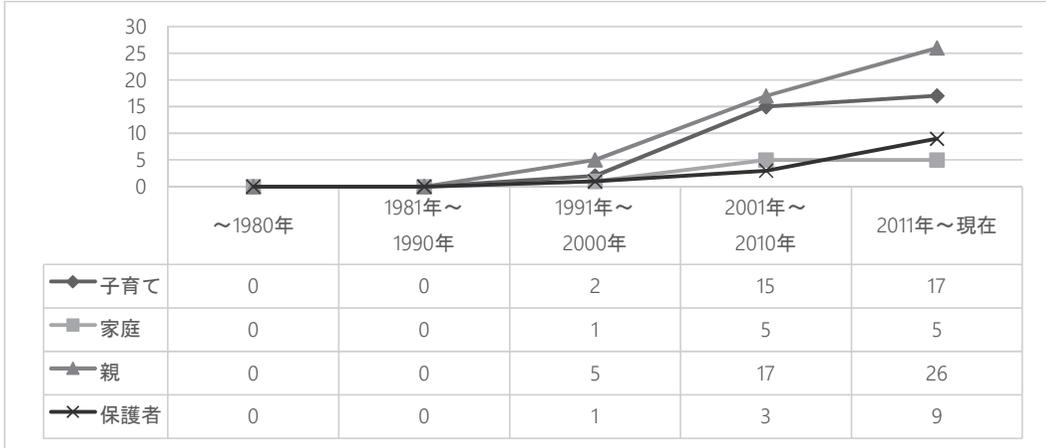


図4 日本保育学会における<子育て>掲載論文数の推移

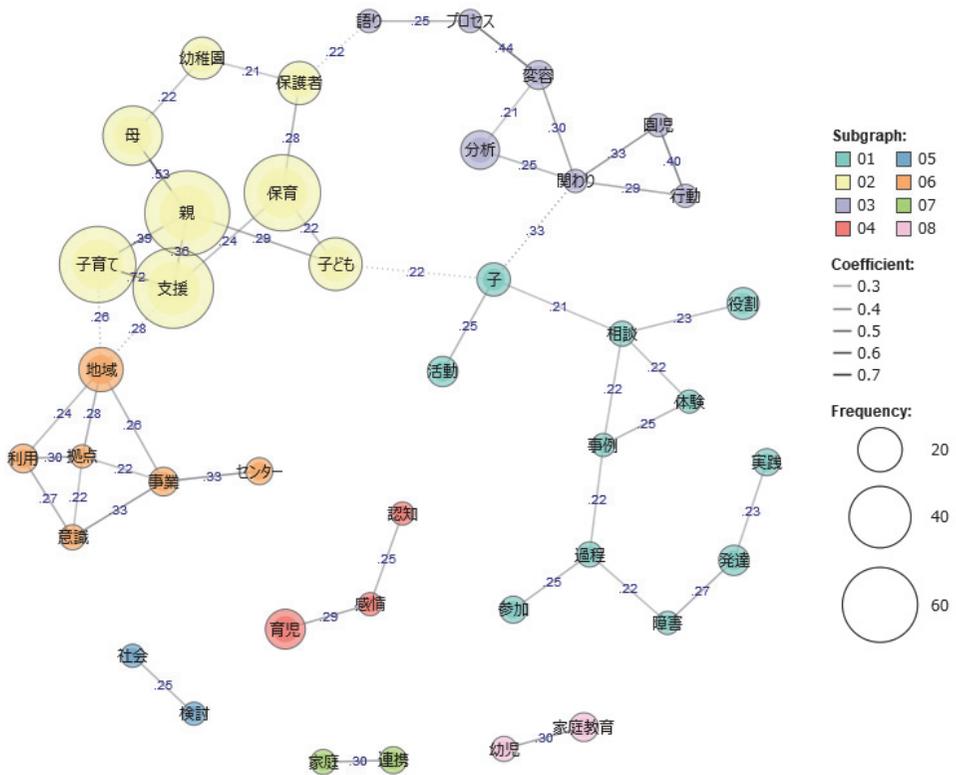


図5 日本保育学会における<子育て>掲載論文題目の共起ネットワーク

2000年代から研究テーマとして〈子育て〉が取り上げられるようになった背景には、20年余りの間に3度の特集テーマが設定されたことが要因として挙げられる。「1.57ショック」(1990年)による「エンゼルプラン」(1994年)の策定を受けて、保育所等では子育て支援施策が導入され、2001年の改正において児童福祉法第18条の4にて保育士の職務として「児童の保護者に対する保育に関する指導」も位置付けられた。こうした子育て支援等の導入・普及に伴い、政策・実践的課題に呼応する形で、親に着目する論文が増加した。

- ・ 「幼児期の家庭教育」(2002年, 第40巻第1号)
- ・ 保育フォーラム「親も共に育つ子育て支援とは」(2007年, 第45巻第2号)
- ・ 「子どもの生活における家庭の役割と保育・教育との連携」(2017年, 第55巻第3号)

したがって、日本保育学会における「子育て」「親」「保護者」などへの関心は20年余りにとどまり、理論的蓄積は十分とはいえない。加えて、「家庭」を題目に含む論文が少ない一方で、施設保育への課題関心や対象児理解を把握するための論拠として「親」「保護者」が扱われる論考が散見され、乳幼児の「育ち」にかかわる大人として親(保護者)が捉えられている。〈子育て〉という私的な営みに対して、子育て支援や保育相談支援が事業・職務として位置付けられてきたため、〈子育て〉過程にいかに関わるかが問われている。それは、保育者と親とが支援―被支援の関係に位置付けられており、親を主体とした「学び」を捉える視点は乏しいと言えよう。

3 日本家族社会学会ならびに日本社会学会における〈子育て〉研究の動向

日本家族社会学会は、1991年に設立された、会員数700名余りを要する学会である。なお、収集分析の対象とした『家族社会学研究』は学会設立以前の1989年に第1巻が発刊されている⁴⁾。日本家族社会学会において、「子育て」「家庭」「親」「保護者」を題目に含む掲載論文数と年代は図6の通りである。なお、「保護者」をタイトルに含む掲載論文は確認されなかった。

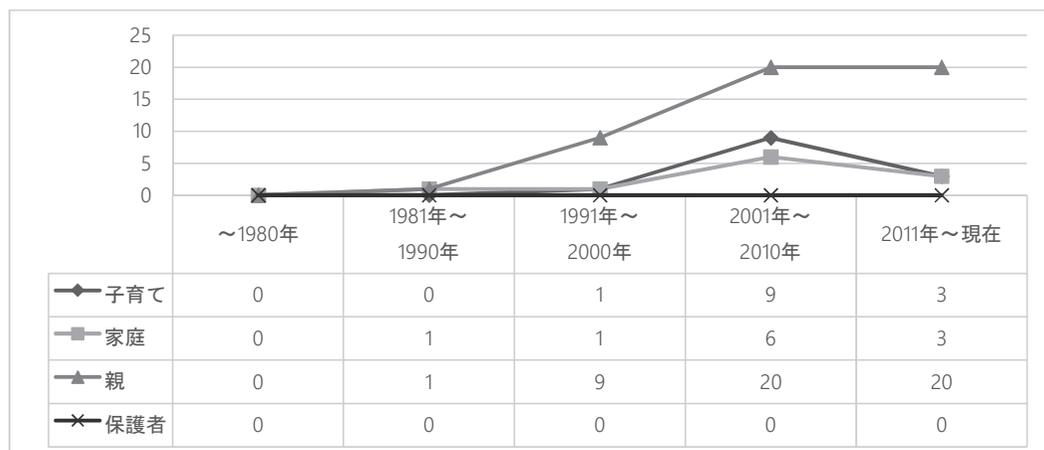


図6 日本家族社会学会における〈子育て〉掲載論文数の推移

特に、子育てだけでなく介護を含めたケアモデルの検討や親族関係を含む家族構造の把握や階層性の検討が特徴として見る事ができる。(図 9)

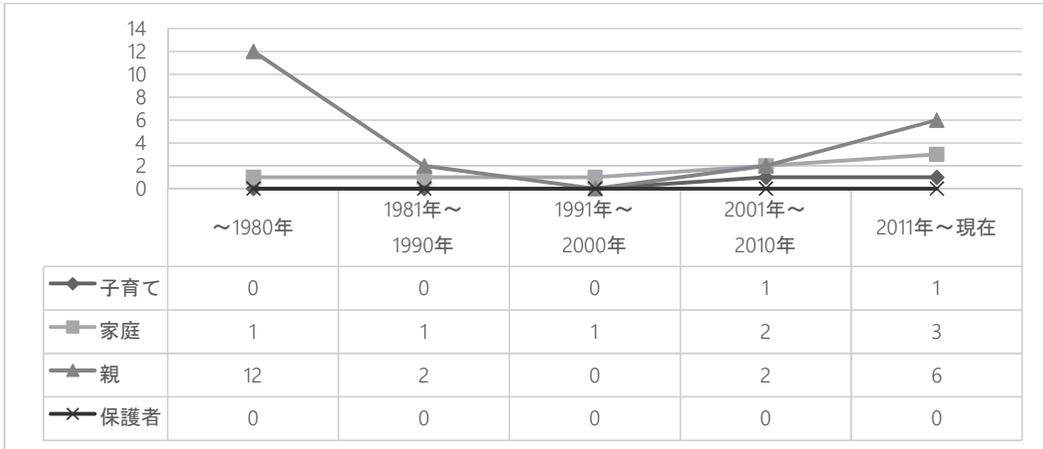


図 8 日本社会学会における<子育て>掲載論文数の推移

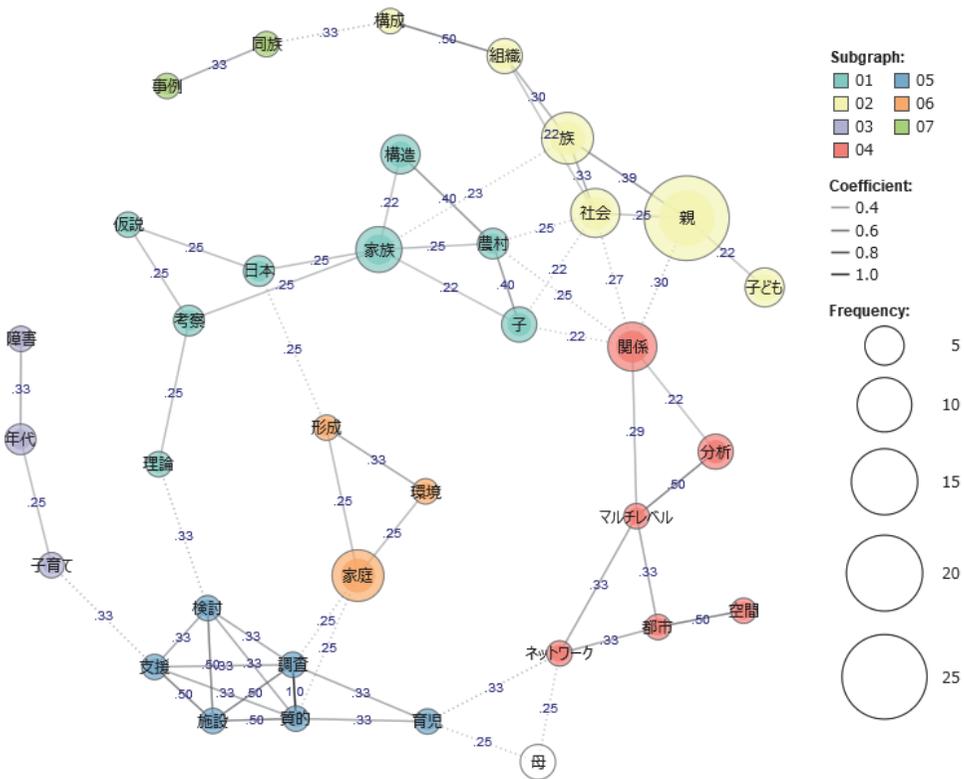


図 9 日本社会学会における<子育て>掲載論文題目の共起ネットワーク

よって、社会学においても 2000 年代以降から研究が増加するとともに、親族を含む家族関係の構造をいかに捉えるかという視点で研究が蓄積されてきたと理解できよう。

4 日本社会福祉学会における<子育て>研究の動向

日本社会福祉学会は、1954 年に設立された会員数 4,000 名を超える福祉系の学会である。<子育て>における社会的支援としての社会福祉の分野として、「子育て」「家庭」「親」「保護者」を題目に含む掲載論文数と年代は図 10 の通りである。

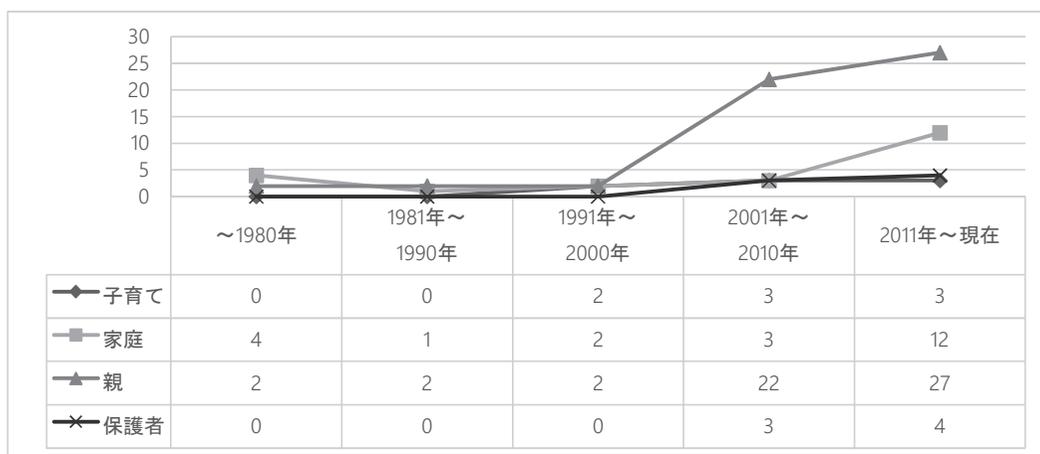


図 10 日本社会福祉学会における<子育て>掲載論文数の推移

日本社会福祉学会における<子育て>関連の掲載論文数を見ると、①「親」を題目に含む論文数が 55 本 (59.8%) と最も多く、研究対象として「親」に着目する傾向にある、②2000 年代以降の掲載論文数が占める割合が 83.7% と急増する、③「子育て」をキーワードに含む論文が、他学会に比べて少ない、の 3 点が確認できた。

日本社会福祉学会における<子育て>掲載論文題目の傾向としては、①障害や困難を抱えた子どもや親・家庭を研究・支援対象として設定する、②虐待等の問題を抱える家庭や親自身をソーシャルワークとしていかに支えるかという視点を有する、③児童福祉に関する社会課題や政策の分析検討、④地域における自立した生活を実現するための施設の役割、といった点などが明示された。(図 11) 困難や問題を抱えた親・保護者や家庭を、専門職がいかに福祉的アプローチから支援するかという視角での研究が重ねられてきたと言える。

Ⅲ 関連学問領域間における<子育て>研究の特徴語の検討

本章では、学会間におけるキーワードに対する特徴語の比較を行うことで、学会間の研究の独自性と類似性について検討したい。具体的な方法としては、<子育て>に関する論文を抽出した際のキーワードと類似性を有する 10 語を抽出した⁵⁾。その上で、この特徴語が、学会間でどのような位相を示すかについて比較・検討した。

表 1 先行研究における「子育て」に関する特徴語の学会間比較

日本社会教育学会		日本保育学会		日本家族社会学会		日本社会福祉学会	
子育て		子育て		子育て		子育て	
子育て	.546	子育て	.600	子育て	.722	子育て	.800
親	.294	支援	.475	参加	.167	地域	.273
支援	.222	地域	.300	育児	.158	保育	.222
地域	.200	保育	.222	活動	.154	センター	.167
政策	.200	課題	.167	父	.143	課題	.167
問題	.200	活動	.162	支援	.133	制度	.154
母	.182	子	.125	世帯	.125	支援	.138
中心	.167	育児	.119	教育	.111	ファミリー	.125
コミュニティ	.167	センター	.111	調査	.111	ママ	.125
構造	.167	実践	.108	比較	.111	英国	.125

表 2 先行研究における「家庭」に関する特徴語の学会間比較

日本社会教育学会		日本保育学会		日本家族社会学会		日本社会福祉学会	
家庭		家庭		家庭		家庭	
家庭	.563	家庭	.546	家庭	.667	家庭	.714
家庭教育	.400	家庭教育	.500	分担	.273	福祉	.192
社会	.353	連携	.200	家事	.231	支援	.146
学校	.333	生活	.167	妻	.167	中心	.125
教育	.300	保育	.149	責任	.167	センター	.120
学級	.267	社会	.143	夫	.167	課題	.120
連携	.267	幼児	.133	研究	.125	社会	.120
雑誌	.200	教育	.125	意識	.118	モデル	.115
年代	.200	子ども	.114	参加	.118	分析	.097
役割	.200	役割	.105	家族	.111	現場	.091

最後に、「親・保護者」に関する特徴語(表 3)では、4つの学会に共通する特徴語として「母」がいずれも上位で挙がっており、<子育て>の実質的な主体ならびに研究の対象として「母親」が依然として大きな存在として扱われている。<子育て>をめぐるジェンダー等の側面からの検討も、なお求められていると言えよう。日本社会福祉学会では「障害」、「虐待」、「里(親)」という用語が見られており、困難を抱える家庭をいかに支えるかが主要な課題となっていることも確認できる。

学会間の異なる特徴が見られた点としては、日本保育学会、日本家族社会学会、日本社会福祉学会において、「子ども」、「子」、「児童」といった用語が共通してみられ、親子関係への関心があることが確認できる一方で、日本社会教育学会において親子関係への着目が見られていない。社会教育が成人教育を主たる研究関心としていることが推察でき、学会間の研究を特色づけるものとして捉えられよう。

表3 先行研究における「親・保護者」に関する特徴語の学会間比較

日本社会教育学会		日本保育学会		日本家族社会学会		日本社会福祉学会	
親		親・保護者		親		親・保護者	
親	.688	親	.584	親	.909	親	.797
母	.385	母	.362	関係	.333	母	.354
子育て	.294	保護者	.254	家族	.278	障害	.277
参加	.250	子ども	.250	母	.264	虐待	.210
事業	.250	幼稚園	.212	子	.216	児童	.200
事例	.214	分析	.149	父	.151	里	.185
中心	.188	関係	.141	子ども	.137	関係	.159
障害	.182	研究	.136	日本	.120	プロセス	.141
生活	.182	育児	.119	社会	.115	子ども	.127
創造	.182	語り	.081	都市	.098	過程	.125

IV おわりに

本稿では、学会誌掲載論文から関連学問領域において〈子育て〉がどのように語られてきたかを整理することで、学際的視点から〈子育て〉研究の特色を検討した。具体的には、選定した4学会の学会誌に掲載された論文のうち、本研究のキーワードである「子育て」「家庭」「親」「保護者」をタイトルに含む論文を検索・収集した。その上で、〈子育て〉に関する学会誌掲載論文一覧を作成し、論文名の計量テキスト分析を行うことで、各学会の研究の動向・視角を考察した。本研究において見いだされた知見としては、以下の3点である。

第1に、関連学問領域における〈子育て〉に関する先行研究の量的把握では、いずれの学会においても1990年代から研究が増加していることが確認できた。こうした傾向は、各学問分野における研究関心の高まりというだけでなく、少子化対策としての子育て支援施策の登場と展開、その背景にある家族観の変容と〈子育て〉に関する課題の広まりに対する懸念が、社会的に拡大・認識されてきたことの証左であろう。

第2に、本稿で取り上げた学問領域・学会における〈子育て〉に関する研究の特徴・研究関心としては、おおむね以下のように捉えられよう。

- 日本社会教育学会：地域をフィールドとして、〈子育て〉を通じた親（大人）の「学び」に関する教育的営為・実践をいかにつくり出すか。
- 日本保育学会：「保育」というアプローチを通して、〈子育て〉や親をいかに社会的に支え、望ましい子どもの「育ち」を生み出すか。
- 日本家族社会学会：家族ならびに家庭における機能ならびに関係性に着目し、社会・時代的背景による変容をいかに捉えるか。
- 日本社会福祉学会：困難を抱える家庭ならびに〈子育て〉等に対して、いかに福祉・専門的アプローチから解決するか。

第3に、関連学問領域・学会によって導かれた＜子育て＞に関する研究的知見に対する「対話」は限定的なものにとどまることが言及できよう。＜子育て＞に研究的関心を有する学会・学問分野では、学問的ディシプリンから形成された特色を有した研究の発展が図られてきた。ただ、＜子育て＞に関する学際性は、十分に担保されておらず、研究キーワードの関連・類似性を確認しても、領域間にまたがる共通性は見いだせず、あくまでも部分的な一致にとどまる。これらの結果からは、研究的知見に対する「対話」は、個人の研究関心や方法論に委ねられてきたことが推察できよう。

したがって、＜子育て＞に関する研究は、20年余りの蓄積はあるものの、比較的新しいテーマであり、親の「学び」と子どもの「育ち」を生み出す＜子育て＞という教育的営為の意義を捉えるには十分ではないことが確認できた。一方で、その論文数は近年になるにつれていずれの学会においても増加傾向にあり、子育て支援や家庭教育支援の政策的な登場を契機として、＜子育て＞への研究関心は広がりつつもある。それは、関連学会において主たる課題となりえず、研究的な狭間に置かれてきた＜子育て＞研究に対する理論萌芽への期待として捉えられよう。

なお、本稿では十分に検証・論述するには至らなかったが、＜子育て＞という教育的営為自体が、＜教育—福祉＞や＜幼児教育—保育＞、＜学び—育ち＞といった多様な側面・性格を有する事象である。＜親—子ども—家族—社会＞のつながりの中で変容する＜子育て＞という教育的な営みを、社会・文化的な背景とともにいかに捉えるかが問われており、そこに＜子育て＞研究の重要な示唆が含まれる。現代において、価値観と実態の多様性を有する＜子育て＞過程における親を主体とした「学び」を解き明かすためには、近接学問領域間での理論と実践の＜対話＞が深められることが前提となる。

最後に、本稿では、＜子育て＞に関する学会の研究動向・特色を把握することを試みたが、あくまでも＜子育て＞研究として設定したキーワードが論文題目に含まれた論考のみを把握・検討したに過ぎない。また、特定の学会誌のみを範疇としたことで、その他の学会誌・紀要等に掲載される、もしくは題目にキーワードを含まない＜子育て＞に関する研究論文などを取り上げることができていない点は課題として残る。そうした課題がありつつも、これまで学会間・研究者間で取り組まれてきた＜子育て＞研究を、同一の俎上にて傾向を把握しようとした点において、本研究の持つ意義は大きい。よって、今後の課題としては、これらの先行研究の到達点を批判的に検討することで、本研究における＜子育て＞過程における親の「学び」を捉える視角を明確にしていきたい。

付記

本研究は、科学研究費助成事業基盤研究(C)研究代表者「保育参加を通じた親の「学びの物語」アプローチとルーブリック評価の開発」(課題番号:19K02616)ならびに令和3年度教育学部・教育学研究科短期プロジェクト「「子育て」過程における親の「学び」に関する基礎的実践研究」の一環として実施した研究成果の一部である。

注

- 1) 本稿では汐見 (2016) の定義を援用し、子どもの「育ち」と親の「学び」の領域として家庭養育・施設保育をあわせた教育的営為を<子育て>と捉える。その上で、本研究における<子育て>過程での親の「学び」を、「子ども理解の深化と子育ての自覚化のための省察過程」と定義する。
- 2) 学会の概要については、日本学術会議における『学会名鑑』掲載情報を参照した。また、『学会名鑑』掲載情報の補足・確認のため、各学会のHPもあわせて参照した。日本学術会議、公益財団法人日本学術協力財団、国立研究開発法人科学技術振興機構『学会名鑑』<https://gakkai.jst.go.jp/gakkai/site/>、日本社会教育学会 <https://www.jssace.jp/>、日本保育学会 <http://www.jsrec.or.jp/>、日本家族社会学会 <http://www.wdc-jp.com/jsfs/>、日本社会学会 <https://jss-sociology.org/>、日本社会福祉学会 <https://www.jssw.jp/> (いずれも閲覧日は2021年12月25日)
- 3) CiNii Articles における具体的な検索方法としては、「刊行物」に各学会誌・紀要等の書名を入力するとともに、「タイトル」に研究のキーワードである「子育て」「家庭」「親」「保護者」を個別に入力した。そのため、論文題目に複数の検索キーワードを含む論文は、両カテゴリーにてカウントしたため、一部重複を含む。
- 4) 日本家族社会学会は、学会HP等を参照すると学会設立は1991年であるが、『家族社会学研究』は、「家族社会学セミナー」を発行元として1989年から発刊されている。本稿においては、発行元は異なるが、巻号数としては連続していることから、1989年の第1巻から収集・分析の対象とした。
- 5) 学会誌掲載論文のリストごとに<子育て>に関するキーワードの「関連語検索」を行った。なお、キーワードに対する特徴語の分析・抽出には、KH Coder においては Jaccard 係数を用いている。詳細については樋口 (2020) を参照のこと。

参考文献

- 樋口耕一 (2020) 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して— (第2版)』ナカニシヤ出版
- 広田照幸 (1999) 『日本人のしつけは衰退したか—「教育する家族」のゆくえ—』講談社現代新書
- 広田照幸 (2006) 『子育て・しつけ』(リーディングス日本の教育と社会第3巻) 日本図書センター
- 池本美香 (2014) 『親が参画する保育をつくる：国際比較調査をふまえて』勁草書房
- 柏木恵子 (2008) 『子どもが育つ条件—家族心理学から考える—』岩波新書
- 家庭教育支援の推進に関する検討委員会 (2012) 「つながりが創る豊かな家庭教育～親子が元気になる家庭教育支援を目指して～」文部科学省
- 子育て学ネットワーク (2008) 『なぜ、今「子育て支援」なのか—子どもと大人が育ちあうしくみと空間づくり』学文社
- 増山均 (1989) 『子ども研究と社会教育』青木書店
- 増山均 (2009) 『子育て支援のフィロソフィア—家庭を地域にひらく子育て・親育て—』自治体研究所
- 増山均, 早稲田大学増山研究室編 (2018) 『アニマシオンと日本の子育て・教育・文化』本の泉社
- 日本保育学会 (2016) 『保育学講座5 保育を支えるネットワーク』東京大学出版会
- 日本教育学会 (2014) 「特集：保育学と教育学の間」『教育学研究』第81巻第4号
- 日本社会教育学会 (1982) 『婦人問題と社会教育』(日本の社会教育第26集) 東洋館出版社
- 日本社会教育学会 (1988) 『現代家族と社会教育』(日本の社会教育第32集) 東洋館出版社
- OECD (2011) 『OECD 保育白書—人生の始まりこそ力強く：乳幼児期の教育とケア(ECEC)の国際

- 比較』明石書店
- OECD (2019)『OECD 保育の質向上白書—人生の始まりこそ力強く：ECEC のツールボックス』明石書店
- 小木美代子, 立柳聡, 深作拓郎, 星野一人 (2005)『子育て支援の創造：アクション・リサーチの実践を目指して』学文社
- 大日向雅美 (2005)『「子育て支援が親をダメにする」なんて言わせない』岩波書店
- 大宮勇雄 (1979)「共同保育所運動における親の教育主体への形成」『東京大学教育学部紀要』第 19 巻, pp.157-166
- 大宮勇雄 (2006)『保育の質を高める—21 世紀の保育観・保育条件・専門性』ひとなる書房
- 榎ひとみ (2015)「子育てにおける学習と連帯—子育てにおける連帯を生成する学習の展開論理—」博士論文 (北海道大学)
- 島津礼子 (2014a)「保護者の保育参加に関する研究—子育て支援における協同的な学びの視点から—」博士論文 (広島大学大学院教育学研究科)
- 島津礼子 (2014b)「幼稚園の「保育参加」における学びの生成について」日本保育学会『保育学研究』第 52 巻第 3 号, pp.34-44
- 汐見稔幸 (2000)『親子ストレス 少子社会の「育ちと育て」を考える』平凡社
- 汐見稔幸 (2016)「子育てと保育」日本保育学会『保育学講座 1 保育学とは 問いと成り立ち』東京大学出版会, pp.7-40
- 汐見稔幸 (2020)「子ども・家庭・社会—教育の土台をめぐる—」木村元・汐見稔幸編著『アクティベート教育学①教育原理』ミネルヴァ書房, pp.17-35
- 首藤美香子 (2009)「OECD の ECEC 政策理念と戦略—"Starting Strong II : Early Childhood Education and Care" (2006) —」『国立教育政策研究所紀要』第 138 集, pp.239-256
- 山野良一 (2016)「発達格差の中の子どもたち—保育と文化資本の観点から」佐藤学他『変容する子どもの関係』(岩波講座 教育 変革への展望 第 3 巻) 岩波書店, pp.71-98

A Basic Study of Parents Learning in the Child-rearing Process :

From analysis of articles published in academic journals

NAGATA, Makoto

Abstract

This paper examines the research characteristics of "Child-rearing" from an interdisciplinary perspective. To summarize how "Child-rearing," "Parents/Guardians," and "Family" have been discussed in conferences related to child rearing.

This paper confirms that research on "Child-rearing" has been increasing since the 1990s. But there is not enough research on "Child-rearing", although it has been going on for more than 20 years. Research interest in "Child-rearing" is now expanding in related academic fields. It is expected that a theory of child-rearing will be developed.

【Key words】 Child-rearing, Parents Learning, Educational Involvement by Family Members, Quantitative Text Analysis